

「教養語彙」としての社会科教科書の語彙

饗 場 淳 子

1. はじめに

日本語母語話者の持つ語彙の中には、教育などによってある程度意識して身につける語であるという性質を持っており、日常生活のすべての場面において頻繁に目にするのではないにせよ、ほとんどの成人が理解し、また使用する、「教養」の語彙とも呼べる語群があるのではないだろうか。『日本語教育事典』において、日本語教育における進んだ段階（中級・上級）の語彙指導では、「頻度は高くないけれども、現代人の言語生活に網の目のように入り込み、現代人としての教養や知識の体系のカナメとなっている語」が考慮されなくてはならない¹⁾と指摘されているが、このような語群と前述の「教養」の語彙は重なる部分が大きいと考えられる。また、同書では、「専門語というにはあまりに現代人の知的生活（普通レベルの）に入りこんでいる語が多い」とし、例として「山地、平野、緯度、きのこ、しめり、養分、保持、放置、膨張」など小学校や高校の教科書に出てくるが、国立国語研究所の雑誌の調査では上位にはない語を挙げている。

このような語群は、一般的教養や知識の土台となっている語彙であると考えられ、特に成人母語話者にとっては「常識」として日常の生活においても必要となるため、特に日本の大学などで高等教育を受けることを希望する（または、高等教育を受けている）日本語学習者にとっては必須の語彙であり、中級・上級の段階では、意識的に提示する必要がある語彙であるとも言えよう。ただし、日本語語彙からこのような語群を取り出したり、その範囲を決めたりすることは大変難しい。

本稿では、この「現代人の言語生活に網の目のように入り込み、現代人としての教養や知識の体系のカナメとなっている語」を仮に「教養語彙」と呼び、この「教養語彙」が含まれていると考えられる語彙として高校教科書の語彙を取りあげ、特にその基幹的な部分の特徴を明らかにすることによって、主に社会科学・人文科学系の「教養語彙」の特徴の一端をとらえることにする。また、その中の、いわゆる「基本語彙」に入りにくい語群を取りあげ、検討することによって、普段、意識されにくい、隠れた「教養語彙」について考えてみたい。

2. 調査の概要

2.1 調査方法

「教養語彙」が含まれると考えられる語彙として、国立国語研究所の『高校教科書の語彙調査』に

における社会科教科書の語彙（以下、「高校調査」）の基幹部となっている語彙を取りあげ、日本語教育用の語彙と比較する。『高校教科書の語彙調査』では、社会科教科書と理科教科書の語彙調査がされているが、今回は、主に社会科学・人文科学系の「教養語彙」について検討するため、社会科教科書の語彙を取りあげることにする。

2. 2 調査資料

①「高校調査」の基幹的な語彙について

『高校教科書の語彙調査』は、「国民が一般教養として、各分野の専門知識を身につける時に必要と思われる語彙の実態を明らかにする」ことを目的として行われた。土屋信一氏（1992a）において、「高校教育は、次の大学における専門教育の基礎になるものでもあるから、高校教科書の基本的な語彙を取り出し、その語彙を習得させておくならば、大学における専門教育に入っていくのは容易であろうと考える。とくに日本の大学での専門教育を目指して留学してくる外国人学生の日本語教育には、有効であろうと思われる」と評価されていることから、本稿においてこの資料を取りあげるのは妥当であろう。また、「高校の教科書の総体に、現代社会をよき市民として生きるために必要な知識と知性の総体が体现されている、と言われる」（門倉正美氏、2005）ことから、「市民的教養」を支える高校教科書の語彙はいわゆる「教養語彙」の有力な候補になりうると考えられる。

社会科教科書（5冊）の調査では、異なり約13000語（M単位）が得られているが、本稿においては、その中の基幹的な語彙を抽出した土屋信一氏（1992a, 1992b, 1992c）による「社会科基幹語彙」をその中心的な語彙として調査対象⁽²⁾とする。

上記の文献（1992a～c）では、林四郎氏（1971）の考え方⁽³⁾に従い、高校社会科教科書5科目（倫理社会、政治経済、日本史、世界史、地理）の語彙調査により得られた延べ211,244語、異なり13,041語（M単位、語数は土屋氏による）を対象として、基幹語彙を抽出した。林氏によるところの「広さ」は5科目をそのまま採用し、「深さ」の尺度は、調査集団の大きさに左右されやすい生の出現頻度ではなく、各教科の使用率を採用し⁽⁴⁾、次のような段階別の2071語⁽⁵⁾を「社会科基幹語彙」の候補として取り出している。

極めて深く5層に及ぶ極めて広い語	393語	A1
極めて深く4, 3層に及ぶ広い語	138語	A2
中位の深さで5層に及ぶ極めて広い語	531語	B1
中位の深さで4, 3層に及ぶ広い語	998語 ⁽⁶⁾	B2
浅いが5層に及ぶ極めて広い語	11語	C1

この「基幹語彙」の候補を抽出する試みは、社会科教育における「基幹語彙」、さらには人文科学、社会科学のための「文化基幹語彙」を得ることを目指したものであり（土屋氏1992b）、この点においても、本稿の目的に合った資料であると思われる。

②日本語教育用語彙について

日本語教育用語彙として、『日本語教育のための基本語彙調査』（以下、「語彙調査」）と『日本語能力試験出題基準』（以下、「出題基準」）の2種を取りあげる。比較の対象とする語彙を1種でなく2種としたのは、教育用の、いわゆる「基本語彙」に入りやすく、見過ごされやすいと考えられる語をなるべく絞り込もうとするねらいからである。広く利用されており、ある程度の選定語数がある語彙（「語彙調査」約6千語、「出題基準」1級の語彙表で約8千語）との観点から選んだ。実際に使用されている日本語教科書の語彙との比較も考えられるが、特に中級・上級用の教科書語彙は、扱われている題材、話題、編集方針などの違いから、教科書によって提出語彙の異同が大きく、個々の教科書との比較では、全体の傾向がつかめないと考えられるため、ここでは、日本語教育において提出される語彙の代表として「語彙調査」と「出題基準」を選び、「社会科基幹語彙」にあってこれらの語彙に入っていない「非共通語彙」について検討することによって、教育のための「基本語彙」に入りにくい「教養語彙」について考えることにする。

「語彙調査」は、「留学生等外国人の日本語学習者が、専門領域の研究または職業訓練に入る基礎としてはじめに学習すべき日本語の一般的・基本的な語彙について妥当な標準を得る」⁽⁷⁾ことを目的とした調査であり、「参考の二種を含めて9種の文献の成果を元に作成した文献であるので、日本語教育界で最も信頼されていて活用されることも多い」（国立国語研究所、2000）文献である。また、「出題基準」は、日本語教育において日本語能力の測定基準として大きな影響力を発揮し（同上文献）、広く利用されている文献である。「語彙調査」と「出題基準」を合わせると、現在の日本語教育において必要とされている語彙のおおよそをカバーできるのではないだろうか。

2.3 調査における規則

調査は以下の規則に従って行った。

- 1) 意味分野別分類・語種別分類は、それぞれの語彙表に付されている情報を利用する。

「出題基準」については、語彙表に付されている漢字表記や注記などを参考にする。

- 2) 語彙表間の同語異語判別にあたっては、原則として見出し語の語形を優先するが、それぞれの語彙表に付されている意味分類番号も参考にする。したがって、「特 (3.132)」（高校調査）と「特に (3.132)」（語彙調査・出題基準）は同語とする。また、国名・地名の略語（日、英など）は、もとの国名・地名（日本、英国）に含む。
- 3) 「高校調査」の語が、そのままの形では「語彙調査」や「出題基準」に入っていないが、これらの語彙表にある語の構成要素となっている場合、原則として「語彙調査」や「出題基準」にも同語が含まれると見なす。一字漢語はこの限りではない。

例：「語彙調査」・「出題基準」の「積極的」は「高校調査」の「積極」を、同じく、「出題基準」の「植民地」は「植民」を含む。

- 4) 「出題基準」において「～」をつけて造語成分等としてとられている語であっても、「高校調査」

と同一の語であるとする。

例：「論」（高校調査）と「～論」（出題基準）

5) 「出題基準」において2つの級にまたがって選ばれている語は、原則として最初に出てくる級をとる。

例：「区」3級と1級→3級 「アジア」3級と2級→3級

3. 調査結果と考察

3.1 「社会科基幹語彙」の特徴

2.2に示した各段階別の語数に注目すると、「極めて深く5層に及ぶ極めて広い語（A-1）」は、393語であり、次の段階の「極めて深く4,3層に及ぶ広い語（A-2）」は基準がゆるくなるため、A-1より多くなることも予想されるが、実際には138語であり、A-1の3分の1程度になることから、「社会科基幹語彙」においては、「深い」語は、その度合いが深いほど「広く」使用される傾向があると言えるのではないだろうか。よく使われる語ほど、分野を選ばず使われている様子が見えてくる。「中位の深さで4,3層に及ぶ広い語（B-2）」は、998語で「社会科基幹語彙」の半数近くを占め、その中心となっている。また、「浅いが5層に及ぶ極めて広い語（C-1）」にも注目しなくてはならない。使用率はあまり高くなくても、どの分野でも共通して使用される、「教養語彙」として欠かせない語である可能性があると考えられるからである⁽⁸⁾。以下、語の意味分野、語種等の観点からさらに詳しく特徴を見る。

3.1.1 意味分野の観点から見た特徴

表1は、語の意味分野と「社会科基幹語彙」の段階の観点からまとめたものである。

「社会科基幹語彙」は、「体の類」の語（74.0%）が中心となっている。国立国語研究所（1964）『分類語彙表』の分布⁽⁹⁾が、「体の類」73.0%、「用の類」13.2%、「相の類」12.7%、「その他」1.0%であるのと比較すると、その分布はよく似ているが、「体の類」だけをその下位項目別に比較した表2では違いが見られる。注目したいのは「社会科基幹語彙」の《1.1 抽象的関係》の割合の高さである。これは、知識の体系、特に社会の事実・現象を記述する場合、抽象的な語の使用が多くなることのアラわれであると考えられる。高校教科書の語彙を母語話者の「教養語彙」の一角を担うものと仮定すると、「教養語彙」には、特に抽象的な語彙の比率が高くなるであろうことが推測される。全体の約4分の1を占める《1.3 精神行為》も同様に重要な役割を果たしていると考えられる。

一方で、《1.4 生産物》、《1.5 自然物》などに分類される語の割合は低めである。生産物および用具物品や自然物および自然現象に関する語は、社会科学・人文科学系の知識体系の記述に必要な語彙の基幹部にはあまり入らないということであろうか。今後、「教養語彙」の総体を考える上では、これらの分野の語を補っていく必要があると考えられる。土屋信一氏（1991）には、抽出の方法は違うが、「理科教科書基幹語彙」が掲載されており、そこに挙げられている語（イオン、液、塩素、回転、気体など）が、その候補となるかもしれない。なお、《1.2 主体》の割合が比較的高いのは、「高校調査」

表1 「社会科基幹語彙」意味分野×段階

	A-1	A-2	B-1	B-2	C-1	合計 (%)	類別%
1.1 抽象的關係	130	30	187	281	3	631 (30.5)	体の類
1.2 主体	51	40	36	145	1	273 (13.2)	
1.3 精神行為	69	40	107	273	5	494 (23.9)	
1.4 生産物	4	5	15	35	—	59 (2.8)	
1.5 自然物	7	10	10	49	—	76 (3.7)	
2.1 抽象的關係	55	1	65	69	1	191 (9.2)	用の類
2.3 精神行為	24	1	34	57	—	116 (5.6)	
2.5 自然現象	2	—	1	5	—	8 (0.4)	
3.1 抽象的關係	42	10	66	62	1	181 (8.7)	相の類
3.3 精神行為	2	—	2	6	—	10 (0.5)	
3.5 自然現象	1	—	2	3	—	6 (0.3)	
4.1 接続等	6	1	2	3	—	12 (0.6)	その他
4.3 感動等	—	—	—	4	—	4 (0.2)	
アルファベット	—	—	4	6	—	10 (0.5)	
合計	393	138	531	998	11	2071 (100.0)	

表2 「体の類」の内訳

	1.1 抽象的關係	1.2 主体	1.3 精神行為	1.4 生産物	1.5 自然物
社会科基幹語彙	30.5%	13.2%	23.9%	2.8%	3.7%
分類語彙表	18.3%	8.8%	27.0%	8.9%	10.0%

が人名・地名を含んでいることによるものであると考えられる。

3.1.2 語種の観点から見た特徴

次に、表3で語種別と段階別の関係を見る。参考のために「高校調査」（異なり、社会科全体）の比率も載せる⁽¹⁰⁾。

「社会科基幹語彙」では、漢語の割合が高く、全体の63.8%を占めている。「高校調査」における漢語の割合（57.1%）と比較しても、漢語に偏っていることがわかる。また、漢語と和語を合わせると全体の約9割になり、中でも深く広い層（A-1、A-2）は、ほぼ漢語と和語で構成されていると言ってよい。人名・地名は、「高校調査」では、両方を合わせて22.5%入っているが、その全体の中での存在感の割には、「基幹語彙」に占める割合は低い。（合わせて4.8%）概して、人名・地名のような固有名詞は、知識体系を記述する語彙において、そのバラエティは豊富であるが、基幹的な部分には入りにくいと考えられる。ただし、人名と地名との比較においては、地名の方が「基幹語彙」に入り

表3 「社会科基幹語彙」語種×段階

	A-1	A-2	B-1	B-2	C-1	合計 (%)	高校調査%
和語	161	18	166	252	1	598 (28.9)	15.04
漢語	208	110	332	662	9	1321 (63.8)	57.10
外来語	—	—	10	15	—	25 (1.2)	4.49
混種語	4	—	9	12	1	26 (1.3)	0.81
人名	1	—	1	9	—	11 (0.5)	11.43
地名	19	10	13	48	—	90 (4.3)	11.13
合計	393	138	531	998	11	2071 (100.0)	100.00

広く使われる語が多いようである。

3.1.3 日本語教育におけるレベルの観点から見た特徴

ここでは、日本語教育用語彙（「出題基準」）におけるレベルの観点から「社会科基幹語彙」を見る。

表4は、「出題基準」のレベル別と「社会科基幹語彙」の段階の関係を示したものである。

表4 「社会科基幹語彙」レベル×段階

	A-1	A-2	B-1	B-2	C-1	合計 (%)
4級	81	9	39	76	—	205 (9.9)
3級	61	11	63	60	—	195 (9.4)
2級	175	64	246	339	3	827 (39.9)
1級	38	25	118	262	4	447 (21.6)
級外	38	29	65	261	4	397 (19.2)
合計	393	138	531	998	11	2071 (100.0)

全体としては、2級の語が一番多く（827語）、以下、1級（447語）、「出題基準」に入っていない級外の語（397語）、4級（205語）、3級（195語）の順となっている。2級～級外の語が約8割を占めることから、「社会科基幹語彙」の日本語教育の基準における難易度は比較的高いと言ってよいだろう。A-1は、他の段階と比べて4、3級の割合が高く、1級と級外の割合が低めではあるが、2級の語を中心とした全体的な分布の傾向は、各段階ともさほど変わらない。このことは、「深さと広さ」は、そのまま日本語教育用語彙における難易度につながるわけではないということを示している。「社会科基幹語彙」においては、「深くて広い」語が必ずしも「易しい」語であるとは限らないのである。

以上をまとめると、「社会科基幹語彙」は、意味分野の観点から見ると、抽象的な語や人間活動（精神・行為）に関する語が中心となっており、語種別では、和語と漢語がほとんどを占める。特に漢語への依存度が高く、外来語、混種語の割合は極めて低い。日本語教育におけるレベルにあてはめて

みると、中級から上級以上の語の割合が高い比較的難易度の高い語彙である。これらは、主に社会科学・人文科学系の知識体系の記述に必要な語彙の特徴の一端を示しているものと思われる。次に、その中でも、いわゆる「基本語彙」に入りにくいと考えられる語彙について検討する。

3.2 日本語教育用語彙との非共通語彙について

ここでは、「社会科基幹語彙」にあって日本語教育用語彙に入っていない語を抽出し、その特徴を見る。この語群は、普段、意識されにくい、隠れた「教養語彙」である可能性がある。

「社会科基幹語彙」の中で、「語彙調査」と「出題基準」の両方に入っていない語は、345語で、これは、「社会科基幹語彙」の16.7%にあたる。ここでは、人名・地名とアルファベットを除いた266語を分析の対象とし、以下、非共通語彙と呼ぶことにする。

非共通語彙を段階別に見ると、A-1（15語）、A-2（19語）、B-1（43語）、B-2（185語）、C-1（4語）であった。A-1の語は、「社会科基幹語彙」全体の中では393語あり、全体の2割近かったが、非共通の語は15語で、かなり少なくなっている。A-1（極めて深く5層に及ぶ極めて広い語）は決して難易度の低い語ばかりではないが、日本語教育用語彙と共通する部分は大きいと言える。このことから、日本語教育用語彙には、「社会科基幹語彙」の最も核となる部分が比較的よく入っていると考えられる。一方、最も非共通部分が大きいのはB-2の語群（185語）であり、非共通語彙の約7割を占めている。これは、もともとB-2に入っている語が多い（2071語中998語）ことにも大きな関係があるが、日本語教育用語彙との比較において、B-2には「社会科基幹語彙」に特徴的な語が多く含まれていることも示唆している。次の表5は、非共通語彙を意味分野と語種の観点からまとめたものである。

表5 「非共通語彙」意味分野×語種

	和語	漢語	外来語	混種語	合計 (%)	類別%
1.1 抽象的關係	20	87	2	—	109 (41.0)	体の類
1.2 主体	—	39	—	—	39 (14.7)	
1.3 精神行為	11	64	4	—	79 (29.7)	
1.4 生産物	—	3	—	—	3 (1.1)	
1.5 自然物	1	4	—	—	5 (1.9)	
2.1 抽象的關係	6	—	—	3	9 (3.4)	用の類
2.3 精神行為	4	—	—	2	6 (2.3)	
2.5 自然現象	—	—	—	—	—	
3.1 抽象的關係	7	7	—	—	14 (5.3)	相の類
3.3 精神行為	—	—	—	—	—	
3.5 自然現象	—	1	—	—	1 (0.4)	
4.1 接続等	—	1	—	—	1 (0.4)	その他
4.3 感動等	—	—	—	—	—	
合計 (%)	49 (18.4)	206 (77.4)	6 (2.3)	5 (1.9)	266 (100.0)	100.0

和語（18.4%）と漢語（77.4%）だけで全体の96%程度を占めており、非共通語彙全体のほとんどが和語と漢語であると言ってよい。意味分野別に見ると、「体の類」が全体の88.3%を占めており、「体の類」の和語と漢語が非共通語彙の中心となっていると見てよいだろう。

和語49語の中には、「陥る、振う、ゆだねる」などの動詞以外に「返し、上げ、生き」などの語や「[組み合わせ]せ、[高]まり、[強]める」、などの接尾辞、「早く、なく（無く）」など語の活用形として日本語教育用語彙ではとられなかったと考えられる語、などが目立つ。

非共通語彙の中で、もっとも注目すべきは、数の上でも大きな位置を占めている漢語であろう。206語中、一字漢語は22語（真、体、層、紀、世、地、個、院、徒、族、民、使、私、術、記、乱、農、路、江、洋、軽、多）、三字漢語は1語のみ（商工業）で、残りの183語はすべて二字漢語である。この二字漢語の中では、《1.1 抽象的關係》、《1.2 主体》、《1.3 精神行為》の3分野がそのほとんどを占める。次に示すのは、非共通の二字漢語の中で《1.1》～《1.3》に分類される語（合わせて172語）である。各分野の中は、意味分類番号順となっている。

《1.1 抽象的關係》

各人、下級、下層、本位、差異、対外、対日、従属、台頭、解消、分立、保全、保持、一掃、撤廃、気運、特質、本性、弊害、主力、国力、反動、政変、激化、改新、継承、打倒、飛躍、航路、波及、浸透、先進、急進、渡来、南下、流出、流入、高揚、投下、集権、併合、融合、合衆、画一、解体、分割、分化、打破、軍縮、自足、衰退、政局、年々、中期、初期、維新、王朝、紀元、戦時、幕末、同年、当面、要地、拠点、西南、東方、南方、北方、西部、東南、東部、南部、北部、中部、内外、十字、全土、全面、双方、極度

《1.2 主体》

一族、氏族、黒人、民衆、諸侯、領主、士族、奴隸、一員、僧侶、官吏、司令、主従、理事、一国、王国、軍国、自国、小国、他国、富国、大国、両国、帝国、村落、極東、東欧、民国、政界、陣営、幕府、軍部、財閥

《1.3 精神行為》

愛国、人道、倫理、儒教、新教、探究・求、追求、国学、儒学、憲章、条例、律令、提唱、公布、宣戦、発布、土着、狩猟、国権、実権、民権、利権、人権、遂行、断行、鎖国、融和、排斥、媒介、締結、争議、加盟、協同、太平、闘争、鎮圧、一揆、王政・制、開国、建国、国政、戦乱、直轄、動乱、立憲、自営、啓蒙、擁護、弾圧、領有、保有、軍需、自給、租税、通商、専売、恐慌、貧富、行使

「下級、初期、東方、西部、他国」など、構成漢字から意味の類推が可能なため、日本語教育用語彙にはとられなかったと考えられる語や、いわゆる「基本語彙」の性格上、選定語数には自ずと制限があるため、優先順位が低くなり、入らなかったと考えられる語もある。例えば、「社会科基幹語彙」のA-1に配されている二字漢語で、「語彙調査」の「基本語二千」と共通している、つまり最も基本的であると考えられる「意味、運動、影響、外国、科学、活動、関係、政治、精神、成長、制度、

政府、世界、戦争、農業、発達、発展、必要、平等、文化、平和、貿易、歴史」等の語を前出の非共通の二字漢語と比較してみれば、その違いがはっきりする。「基本語二千」と共通しているこれらの語は、非共通の語に比べると、優先順位の高い一次的な語群であると言えよう。ただし、次の段階の「基本語六千」とA-1に共通している「安定、以来、援助、改革、開発、拡大、革命、確立、機関、企業、貴族、規模、行政、共同、共和、軍事、経営、形成、権力、自治、資本、水準、政策、大戦、普及、封建、保護、保障」等の語と比較すれば、非共通の語は、語彙表の目的によっては、「基本語六千」レベルの語との入れ替え、または、語の追加の際に考慮の対象となる語群であると言えそうである。

この日本語教育用語彙に入らなかった語は、決して特殊な語ばかりとは言えず、例えば、社会科学・人文科学系の文献だけでなく、新聞等を読んだりするための理解語彙として、また、大学におけるレポート・論文作成などの際の使用語彙として必要となる語も多く見られる。例えば、《1.1》の「差異、従属、台頭、解消、一掃、撤廃、特質、弊害、反動、激化、継承、飛躍、波及、浸透、流出、併合、融合、画一、解体、分化、打破、衰退、拠点、極度」等の語群は、知識体系の記述には欠かせないと考えられるが、母語話者にとっては特別な語というわけではなく、新聞やニュースなどで日常的に見たり聞いたりする語でもあるため、高等教育を受ける学習者にとっては、「基本語彙」であるということもできそうな語群である。《1.3》にも、「人道、探究・求、追求、提唱、公布、人権、遂行、融和、排斥、媒介、締結、争議、鎮圧、直轄、啓蒙、擁護、弾圧、保有、恐慌、貧富、行使」等、社会的な事象の記述に不可欠な語が見られる。非共通語彙は、語数制限のある「基本語彙」には入りにくい、共通している語彙同様、大学・大学院での勉学のみでなく、日本社会での社会人としての生活や、日本文化の理解の際の土台となる語群と見られ、大学での専攻に関係なく必要な語として早い段階で補っていくことが望ましい語群であると言えそうである。

次に、前出の非共通の二字漢語が、日本の大学生を含む成人母語話者が読む、いわゆる「教養語彙」が含まれていると考えられる文章において、実際にどのように使われているかを見るために、試みに『日本の論点』⁽¹¹⁾ (1995、1997)の本文部分（題名・見出し含む）での使用状況について調査した。この2年分の『日本の論点』の本文に1回以上使用されていた語は、151語であり、一度も出てこなかったのは、「下層、反動、航路、南下、自足、要地、西南、東部、氏族、諸侯、領主、民国、愛国、新教、儒学、宣戦、発布、実権、鎮圧、一揆、動乱」の21語のみであった。また、1回以上使用されていた151語のうち、100語は、1995・1997の両方で使用されていた。2年分のみを見たことを考えると、この非共通の二字漢語は、日本語教育用の語彙2種には入らなかったが、かなりの確率で、成人母語話者が教養として読む文章に入ってくる語群であると考えてよいだろう。

これらの語の中には、扱われる話題にその出現が左右されることが多いことが推測される語と話題に関係なく知識体系の記述に欠かせない語があるとも見ることができよう。後者の例として、2年分の両方で使用されていた「差異、解消、撤廃、特質、弊害、激化、波及、浸透、画一、解体、分割、衰退、双方、極度、追求、排斥、保有、行使」などの語が挙げられる。また、前者に含まれると考えら

れる語は、一見、汎用性がないように見えることもあるが、実際に成人母語話者が読んだり、書いた文章の中では、「結核王国」,「平成維新」,「有権者の「奴隷」」(『日本の論点 1995』)など、教科書に出てくる基本的な意味をふまえた上で、そこから派生した意味・用法で使われることが往々にしてあるため注意したい。これらは、言語生活に網の目のように入り込んでおり、普段は意識されないが、日本語母語話者が教養として持っている語彙の特徴を、ある意味でよく示しているものであると言ってもよいかもしれない。このような語彙についての詳細な分析は、今後の課題としたい。

4. おわりに

本稿では、日本語母語話者の「教養語彙」が含まれると考えられる社会科教科書語彙から抽出された「社会科基幹語彙」の特徴と、その中で日本語教育用語彙に取りあげられにくいと考えられる語彙（非共通語彙）について検討した。この非共通語彙は、「基本語彙」のようなものには入りにくい、共通する語彙同様、いわゆる「教養語彙」の候補になりうると考えられる語群である。気づきにくい、隠れた「教養語彙」であるとも考えられ、日本語教育においては、特に中級・上級の語彙選定の際、考慮すべき語群となりうるのではないだろうか。

実際には、その範囲を明確にするのが難しい「教養語彙」であるが、このような語彙を様々な観点から抽出し、語彙教育に効果的にとり入れていくことは、日本語教育の分野においてだけでなく、母語話者にとっても有用であろう。大学等での勉学でのみ必要となるのではなく、現代人としての一般的な教養や知識の土台となる語彙であると考えられるからである。本稿では、「教養語彙」が含まれると考えられる語彙として「社会科基幹語彙」を取りあげたが、この語彙は、語彙調査から直接得られた語彙であり、母語話者が高校卒業までに習得する一般的な知識・教養を支える語彙の基幹的な部分であることから、日本語教育の観点から見ると、特に高等教育を受けることを前提としている日本語学習者にとっては、中級以降の基本的な語彙に位置づけられると考えられる。このような語彙を必要とする学習者に対しては、学習の早い段階から意識的に提示し、できれば使用語彙として習熟するようにすることが有効であろう。

「社会科基幹語彙」の語の意味・用法についての分析や自然科学系の語彙についての検討などは、今後の課題としたい。

注(1)『日本語教育事典』「語彙教育」の項、窪田富男氏執筆。

新版(2005)では、同記述の掲載がなかったため、ここでは旧版から引用した。

- (2) 土屋氏によれば、この「社会科基幹語彙」は今後、内容を吟味する必要があるとされているが、本稿では、この語彙を語彙調査の結果から直接、機械的な手順で求められた、社会科教科書語彙の基幹的な部分であるにとらえ、利用することにする。

なお、調査対象として、漢字の読みと語種が付されている 1992b の語彙表を使用する。

- (3) 基本語彙といわれる概念を整理し、基礎語彙・基本語彙・基準語彙・基調語彙・基幹語彙に分けて定義している。基幹語彙は、他の語彙と違って、功利性を全く除き去ったところに成立する概念であるとする。

基幹語彙とは、ある語集団の中に、その集団の骨格のような部分として、その集団をささえる基幹的部

分として、現に存在する、語の部分集団を呼ぶ。

語彙調査から直接に求めることができるのは、基幹語彙だけであるとも述べる。

さらに、同書では、「新聞語彙調査」（昭和41年新聞3紙対象）を使って、度数10以上の5417語（長単位）の中から約1000語の基幹語彙を求めている。林氏は語の使われ方の「広さ」（語がいくつの層にわたって出現するか）と「深さ」（各層の中での出現頻度）の観点から、「極めて幅が広く、深さも深いもの」から「かなり幅が広く、深さ中位のもの」までに入る約1000語を「新聞基幹語彙」として示している。

- (4) 各教科の重みを等しくするため、各教科の累積使用率の平均値を計算し、各語の「深さ」の度合いとした。（土屋氏 1992a～c）
- (5) 土屋氏（1992a～c）の本文では、2061語となっている。
- (6) 土屋氏（1992a）の本文では938語、（1992b, c）では988語となっている部分もある。
- (7) 『日本語教育のための基本語彙調査』『I 解説』より。
- (8) C-1には次の語が入っている。「移行、恩恵、返し、協会、極度、工夫、継続、遂行、脱する、超、媒介」
- (9) データは『図説日本語』（p. 190）より引用。
- (10) 数字は、国立国語研究所（1983, p. 41）をそのまま載せたため、この部分のみ小数点以下第2位までとなっている。なお、この調査では、次の考え方から人名・地名をとっている。「普通には語種別の図には含めない固有名詞の「人名・地名」を、自立語内に含めたのは、これが教科書の一つの特徴であると考えたためである。」（p. 40）
- (11) 百名余の執筆者による書き下ろしの論文が掲載されている年刊誌。政治、経済、法律、教育、スポーツ等、幅広いテーマを扱っており、学生（レポート・小論文等の資料として）やその他社会人（教員、政治家、マスコミ関係者、ビジネスマンなど）が主な読者として想定されている。（参考：文藝春秋ウェブサイト）

参考文献

- 門倉正美（2005）「教養教育としてのアカデミック・ジャパニーズ」『言語』34-6
- 国際交流基金他（2004）『日本語能力試験出題基準〔改訂版〕』第2刷 凡人社
- 国立国語研究所（1964）『国立国語研究所資料集6分類語彙表』秀英出版
- 国立国語研究所（1983）『国立国語研究所報告76 高校教科書の語彙調査』秀英出版
- 国立国語研究所（1984）『国立国語研究所報告78 日本語教育のための基本語彙調査』秀英出版
- 国立国語研究所（1984）『国立国語研究所報告81 高校教科書の語彙調査Ⅱ』秀英出版
- 国立国語研究所（1984）『日本語教育指導参考書12 語彙の研究と教育（上）』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所（1985）『日本語教育指導参考書13 語彙の研究と教育（下）』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所（1989）『国立国語研究所報告99 高校・中学校教科書の語彙調査分析編』秀英出版
- 国立国語研究所（2000）『国立国語研究所報告116 日本語基本語彙—文献解題と研究—』
- 土屋信一（1991）「文化語彙の探索—共出現からみた社会科教科書—」『共立国際文化』創刊号（第1号）共立学園共立女子大学国際文化学部
- 土屋信一（1992a）「基幹語彙を求めて—語彙表データの分析—」『日本語学』11-1 明治書院
- 土屋信一（1992b）「文化語彙の探索—社会科基幹語彙表—」『共立国際文化』第2号Ⅰ 共立女子学園共立女子大学国際文化学部
- 土屋信一（1992c）「基幹語彙の探索」『文化言語学 その提言と建設』文化言語学編集委員会編 三省堂
- 日本語教育学会（1982 初版/1983 使用）『日本語教育事典』大修館書店
- 日本語教育学会（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店
- 林大監修・宮島達夫他編（1982）『図説日本語』角川書店
- 林四郎（1971）「語彙調査と基本語彙」『国立国語研究所報告39 電子計算機による国語研究Ⅲ』秀英出版
- 森田良行（1990）『日本語学と日本語教育』凡人社
- 文藝春秋『日本の論点1995』、『日本の論点1997』